

IV-2 ヨーロッパ言語ポートフォリオ (European Language Portfolio: ELP)

本節のねらい：ヨーロッパ言語ポートフォリオの意義や活用法を紹介し、JF スタンダードで開発するポートフォリオの可能性を探る。

キーワード：学習者中心、自律した学習者、自己評価、複言語主義、複文化主義、異文化間能力、生涯学習

1. ヨーロッパ言語ポートフォリオとは

1.1 ヨーロッパ言語ポートフォリオとは

ヨーロッパ言語ポートフォリオ (European Language Portfolio、以下 ELP) は、欧州評議会と「言語のためのヨーロッパ共通参照枠」(以下、CEFR) の理念を教育現場で実現するための道具である (Schärer 2004: 5)。ELP は、言語能力をヨーロッパ共通の尺度で自己評価し異言語・異文化体験を簡潔に示す「言語パスポート (Language Passport)」、言語能力のほか、言語学習履歴や学習目標、異文化・異言語体験を詳細に記録する「言語バイオグラフィー (Language Biography)」、学習成果や検定証明書を保存する「資料集 (Dossier)」の3つで構成される。ELP は、言語学習の過程や異言語・異文化体験など「非常に多種多様な広がりを見せる学習者の達成成果を、学習者のさまざまな必要性、性質や素質に応じて記述」することができ、「それを公的な形で認める仕組み」である (Council of Europe 2008: 5)。学習者は、言語能力の熟達度 (language proficiency) や異文化間能力 (intercultural competence) を記録し自己評価することを通じて、複言語能力を育成し、生涯にわたり学習を続ける力と学習動機を得ることができる (Lenz and Schneider 2002: 68)。

1.2 ポートフォリオ評価とは

まず一般的なポートフォリオ評価の特徴について述べる。ポートフォリオとは元々紙バサミという意味で、ルネッサンス期の芸術家が自分の作品を綴じ、就職の際に示す目的で使用されていた。現在は、金融資産の組み合わせという意で使われることが多いが、教育においては 1980 年代後半の英国や米国で、それまでの標準化されたテストや試験に代わる代替的な (alternative) 教育評価のあり方として提唱されてきた。

ポートフォリオ評価の特徴として主に以下の4点があげられる。

- 学習者自身が管理する学習経験、学習成果、成果物の記録である。
- 定量的に測定可能な能力のみを測るという標準化されたテストの限界に対し、現実の文脈の中での真正な課題達成の能力を、その過程の中で評価することが可能である。
- ポートフォリオを媒介に学習者・教師・同僚などが話し合うことが、内省・自律的な学習能力の養成につながる。
- 学ぶ人は知識の受容者ではなく社会的活動を通じて知識を構成する主体であるとする構成主義 (constructivism) の学習理論に基づいている。

(シャクリー他 2001、田中 2008)

ポートフォリオ評価は、後述する形成的評価の代表的な手法の1つであり、定量的な客観的データのみでは表すことのできない人間の能力を、内省を通じて包括的に評価する手法として学校教育以外の分野でも広く活用されている。

2. ヨーロッパ言語ポートフォリオ

2.1 背景・目的

CEFR は、ヨーロッパの言語学習・教育に透明性と一貫性をもたらす目的で、欧州評議会の言語学習・教育観とともに共通参照レベルおよび例示的能力記述文を提示した参照枠組みである。そこには複言語主義、学習者中心の考え方、生涯にわたる言語学習といった欧州評議会の理念が大きく反映されている。一方、ELP の大元となる考え方は 1980 年代半ばにスイスで誕生している。スイス教育評議会（以下、EDK）¹ は、スイス国内の人の移動を促進するため、また、義務教育から後期中等教育への移行を円滑に行うために、各州協力体制のもと、「共通のものさし」で生徒の言語能力を測る必要性を説いた。この考え方は“points of encounter”（接触点：義務教育から後期中等教育への移行時点）と呼ばれるが、移行時点での言語能力を記述し他者に明確に説明するという必要性は、次第に教育機関を超えた領域でも支持されるようになり、一方、「自己評価」を含む内省的な評価のあり方は、従来の評価手法に代わるものとして、種々の教科（例：数学）で受け入れられていく。

1991 年のルシュリコン・シンポジウム²において、ヨーロッパ内の一貫性と透明性を実現するためにポートフォリオを導入することが決定され、「ELP は、共通参照レベルに基

づいており、個人が持つもので、そこにそれぞれの個人が、現代語に関するそれまでの累積的な経験や資格認定を記録していくもの」(Council of Europe 1992: 40 筆者訳)であることが確認された。「共通のものさし」に関しては、1996年からスイス国立科学研究機関プロジェクト(Swiss National Science Foundation-SNF Project: 以下、スイス・プロジェクト)として、共通参照レベル、例示的能力記述文、およびELPの開発が同時並行的に進められた。同年よりスイスポートフォリオの基本モデルの検証作業が開始され、1999年欧州評議会による公式パイロットテストを経て、2000年にスイスのEDKポートフォリオが欧州評議会の第1号として認定を受けている。

ヨーロッパ日本語教師会がまとめた『ヨーロッパにおける日本語教育と Common European Framework of Reference for Languages』(2005)では、欧州評議会の“European Language Portfolio: Principles and Guidelines”(Council of Europe 2004b)を引用してELPの目的を以下のように列挙している。

- ヨーロッパ市民の相互理解を深める
- 多種多様な文化、生活を重んじる
- 言語的、文化的多様性を保護すると同時に促進する
- 生涯にわたり複言語主義を身につける
- 言語学習者を育成する
- 自立学習 (independent language learning)³ができる能力を開発する
- 言語学習プログラムに透明性および一貫性を持たせる
- 移動を容易にするために、言語能力および資格を明瞭に記述する

(小木曾 2005: 53)

当初、スイス・プロジェクトの目的は共通参照レベルを構築することであったが、次第に、共通参照レベルや例示的能力記述文だけでは実現し得ない欧州評議会の理念を具現化することに重きが置かれるようになった。中でも、基本的な理念となる自律した学習者、生涯学習、複言語・複文化主義、異文化間能力について以下に整理する。

• 自律した学習者

Lenz (2004) は、欧州評議会が民主的な社会を構成する市民の資質として、自律性 (autonomy) と自己評価 (self-evaluation) の2つの概念を重視しており、欧州評議会がポートフォリオ評価を採用した背景を説明している。自律性に関しては、Holec (1981) を

引いて、「自身の学習の責任を持つ能力」と定義し、自律的な学習者は「目標を設定する」「学習の内容と進捗を決める」「学習の方法やテクニックを選ぶ」「(リズム、時間、場などの側面から)適切に話せるようになる過程をモニターする」「何が習得できたか評価する」(Lenz 2004: 22、筆者訳)といった観点で自らの学習を進めていく能力を持つとしている。ELPは、自律した学習者を育てる装置を備える必要があり、学習者自身によって管理されるものである。

•生涯学習

CEFRでは、言語学習を生涯にわたるものと考え、学校などの教育機関以外での言語学習や異言語・異文化体験に価値を置いている。言語学習者は、社会における言語使用者として、生涯を通じて言語を使用し、学んでいく主体的存在と見なされる。

•複言語主義・複文化主義と異文化間能力

1998年に開催された欧州評議会参加各国の大臣会議において以下の点が確認された。

- より効果的な国際コミュニケーションにより、相互理解と寛容性、アイデンティティと文化的差違を尊重する心を育てること。
- ヨーロッパの文化生活の豊かさと多様性を維持し、さらに発展させること。そのためには、お互いが今まで以上に各国の言語、地域言語についての知識を、あまり教えられない機会のない言語についても、持つことが必要である。

(Council of Europe 2008: 3)

複言語主義、複文化主義は、ヨーロッパ市民が複言語能力(plurilingual competence)や複文化能力(pluricultural competence)を身につけることにより実現するとされる。これらの能力は「コミュニケーションのために複数の言語に、すべて同じようには言わないまでも、習熟し、複数の文化での経験を有する状態」であり、「この能力は、別々の能力を重ね合わせたり、横に並べたりしたものではなく、複雑で複合的」なものである(Council of Europe 2008: 182)。

さらに、複言語能力を身につけた複言語使用者について次のように述べている。「言語学習者は複言語使用者(plurilingual)となり、異文化適応性(interculturality)を伸ばすのである。それぞれの言語や文化を身につける能力は、他の言語の知識によって変化を受け、異文化に対する認識、技能、ノウ・ハウを習得する上での助けとなる。また、それらの能力によって、個人個人が豊かで、より複合的な個性を身につけ、その言語学習能力もより強化され、新しい文化を体験できるようになる」(Council of Europe, 2008: 44)。つまり、

言語教育を通して身につくとされる異文化適応性 (interculturality)⁴ は、1つの言語・文化に付随する能力ではなく、他の言語に応用可能な汎用性のある能力として捉えられる。個人の中の複言語性を養うことが異文化適応性の育成につながるのである。

また前節で述べたとおり、個人の中の複言語性を言う際には、言語使用者／学習者の部分的能力 (partial competence) が考慮されている。部分的能力とは「狭い範囲、または限定的な範囲の外国語習得」(Council of Europe 2008: 148) であり、「複言語能力を豊かにする構成要素」として位置づけられるものである。

2.2 ELP の機能と構成

2.2.1 ELP の機能

ELP は、「知識と技能を認知し評価する際には、複言語と複文化の能力・技能が発達する環境と経験を考慮に入れねばならない。European Language Portfolio の作成により、学習者一人一人がさまざまな面から自分の言語発達を記録できるようになったことは一つの進歩である。」(Council of Europe 2008: 188) と説明される。また、透明性・一貫性を実現し、自律的な学習者、生涯学習、複言語・複文化主義、異文化間能力などの基本概念を、実際に教育現場や利用に関わる様々な機関で共有していくために、報告的機能 (documentation and reporting function) と教育的機能 (pedagogic function) の2つが ELP の役割として示されている (Lenz 2004, Lenz and Schneider 2001)。

報告的機能とは、人の移動を保障し円滑にするために、地域や国独自の認定方式を CEFR というヨーロッパ共通の参照枠に関連づけるものである。言語能力の熟達度を共通のものさしで総括的に評価することで、就学や就労に際して言語能力や学習の成果を分かりやすく証明できるという透明性を確保することができる。一方、教育的機能とは、学習者の内省と自律性を促進し生涯学習を支援するものである。言語学習の過程を記録し可視化することで、内省を通じた自己評価を実現すること、自分の学習に責任を持つこと、さらには学習動機を高めることが期待される (Little and Perclová 2001: 3)。

上記の機能とその特徴をまとめたものが表1である。

表1 ELPの機能の特徴 (Lenz and Schneider 2001: 5 筆者訳、一部改編)

記録・報告上重視する点 (報告的機能)	教授・方法上重視する点 (教育的機能)
学習の結果と成果物 総括的評価 (summative assessment) 透明性 比較可能性	学習過程 形成的評価 (formative assessment) 学習動機 学習機会

総括的評価 (summative assessment) とは「授業コースの終わりにこれまでの成果を成績としてまとめるものである。それは必ずしも熟達度の評価ではない。事実、総括的評価の多くは標準型型の定点評価であり、達成度評価である」(Council of Europe 2008: 198)。一方、形成的評価 (formative assessment) は、「学習の進み具合や学習者の強み、弱点に関する情報を集める継続的な評価である。教師はこれらの情報を授業コースの計画や学習者へのフィードバックに役立てることができる。形成的評価という言葉は、広い意味で用いられることが多く、質問紙や話し合いから得られた数量化できない情報も含まれる」ものである (Council of Europe 2008: 198)。形成的評価は主に教育的側面で重要である。

2.2.2 ELPの構成

欧州評議会が認定する ELP は基本的に「言語パスポート」「言語バイオグラフィー」「資料集」の3部から構成される。その特徴をまとめたものが表2である。

主に報告的機能を担う「言語パスポート」は、CEFRの共通参照レベルに基づく言語の熟達度の概要、試験結果、資格認定など、ある時点での総括的評価のほか、留学や海外研修、旅行などの異言語・異文化体験を簡潔に記録する部分である。言語能力の証明書としてヨーロッパでの汎用性を持たせるためには、ある程度統一した形式を用いる必要があり、欧州評議会はスイス EDK の成人向け ELP (15歳以上) の言語パスポートを Standard Language Passport (以下、標準言語パスポート) として認定している。標準言語パスポートは他機関の ELP にも広く利用されている (Lenz and Schneider 2001: 17)。

「言語バイオグラフィー」には、言語学習歴や異言語・異文化体験を詳細に記録する。主な項目は、「言語学習と異文化体験の個人史」「チェックリスト (共通参照レベルに関するもの)」「チェックリスト (共通参照レベルに関係ないもの)」「目標・学習計画」であるが、「チェックリスト (共通参照レベルに関係ないもの)」は各 ELP で自由に追加できる項目で、表2では、Lenz and Schneider (2001) に掲載されていたノルトライン=ヴェス

表 2 ELP の主な構成要素⁵

構成	内容の概要	内容				備考	
		自己評価表	教師による評価	機関による評価 (資格や試験など)	特徴	異文化間能力の扱い	
言語 ハスポート	言語の熟達度の概観 (CEFR の 6 レベル)				<ul style="list-style-type: none"> • 報告的機能 • 総括的評価 • 学習者の言語能力や言語的・文化的経歴を概観するのに便利である。 • ヨーロッパ内で通用する言語の身分証の役割がある。 	<ul style="list-style-type: none"> • 自己評価表の高いレベル (B2 以上) になると、コミュニケーションにおける社会語用論的な気づきや文化的要素も can do 記述に含まれる。 • 現時点で、自己評価表は非言語的な社会文化的習慣には対応していない。 	
	異文化体験	異文化体験、 言語使用状況、 言語接触の経験					
言語 ハイオクグラフィ	言語学習と異文化 体験の個人史	言語学習歴 (母語も含む、 学校内外)	社会・異文化経 験 (学校内外)	異言語体験 (TV、新聞など日 常的な言語接触 も含む)	<ul style="list-style-type: none"> • 教育的機能 • 形成的評価 • 多言語状況を想定している。 • CEFR の自己評価表を学習者・ELP 使用者対象にカスタマイズする必要性がある。 • 自分の言語能力や言語学習を客観的にみつめ、メタの視点を養う。 • 内省 (学習計画・目標設定や自己評価も含む) を通じて自分の言語学習に積極的に関わる。 • 複言語性・複文化性に対する視点を養う。 • 学習者自身についてより詳細な情報を記録する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 自己評価表の高いレベル (B2 以上) に関する can do 記述がある。 • 大人の学習者向け ELP モデルの多くは、異文化的な体験を内省して自由に記録する形式をとる。 	
	チェックリスト： 共通参照レベルに 関係あるもの ¹⁾	自己評価チェッ クリスト (学習者 が自由にチェッ ク項目を追加で きるものもある)	その他 (例)：他 者による評価の チェックリスト、 目標設定				
	目標・学習計画	学習の計画や目 標の設定	学習ストラテ ジー (学習方法、将来 の夢)	(例) 異文化的・社会 文化的能力 (社 会文化知識、異 文化対応)			
資料集	学習成果の収集 フォルダ	分類につき特に 指定はない。 • 報告的 / 教育的 • プロジェクト / 作文 / 映像など 資料 • 時系列 など			<ul style="list-style-type: none"> • 報告的・教育的機能 • 学習者が自ら、学習の成果や経験を選り取りして収集する。 • 学習者がその言語で何ができたのか目に見える形で保存できる。 • 更新・再構成されることもある。 • 複言語性・複文化性を養う。 	<ul style="list-style-type: none"> • 資料集に何を収集するかは所有者 (学習者) の責任であるため、資料集に収集された資料がどの程度異文化間能力を描写するかは、異文化間能力が個人の学習体験によってどの程度重視されたかによる。 	

¹⁾ 「共通参照レベルに関係のないチェックリスト」は個々の ELP が独自に付加できる項目で、本表ではノルトライン州 (ドイツ) の ELP を参考にした。

トファーレン州（ドイツ）の ELP モデルから項目を抜粋している。学習者は、CEFR の共通参照レベルに基づいて言語能力の熟達度を測る自己評価チェックリストのほかに、自分の言語学習の目標や学習計画、学習ストラテジーに関して記録することができる。複数の言語や文化を扱うことは複言語・複文化能力の育成につながり、学習の経過を記録して内省を繰り返すことは、形成的評価という観点から教育的機能を果たす。

「資料集」は、言語パスポートや言語バイオグラフィーで記述した異言語・異文化体験や言語学習の成果物を取める部分であり、本来の意味のポートフォリオの役割を担う。資料集には、プロジェクトワークの結果や「目標言語を使用し、実際の生活で達成できるもの、たとえば、手紙のサンプル、メモ、レポートのようなものを保管しておく。」（小木曾 2005: 56）だけでなく、スピーチ・発表・会話などの音声・映像データなども取めることができる。

ELP は学習者に所属し、学習者が自己管理するものであるが、教師もその情報を共有する。さらに、進学先の教育機関、留学等の受け入れ先、インターンシップ、就職の受け入れ先など、様々な相手に対して、言語に関する情報を伝える仕組みだといえる。

2.3 教育現場での利用

欧州評議会は、学習者集団に適した ELP モデルを個々の地域、教育機関が開発することを推奨している。各教育現場で ELP を効果的に活用するためには、まず教師が ELP の役割を理解し、形成的評価と総括的評価という 2 つの視点を適切に授業に取り入れることが求められる。Kohonen et al. (2002) は、教師が (ELP の利用を) 授業中に積極的に支援する必要性を指摘している。ただし、ELP の運用について書かれた様々な文献に「コースのどの時期に利用するか」「コースの中でどう学習者に説明するか」などの例示はあっても⁶、いわゆる標準的な使用マニュアルのような記述は見られない。これは、多様な言語教育の現場において独自の ELP を開発し、各自の文脈で利用することが求められるからであろう。

Little and Perclová (2001) による “The European Language Portfolio: a guide for teachers and teacher trainers” (以下、教師用ガイドブック) は、ELP を実際に教室で利用する教師や教師指導者向けに作られた手引書である。教師用ガイドブックでは、教師の時間や労力の制約を考慮したうえで、ELP 活用が中長期的には必ずや学習者や教師にメリットを与えることが指摘される (Little and Perclová 2001: 25)。そして ELP の教育的機能の根幹は、内省 (reflection) と自己評価 (self-assessment) であると述べ (同、p. 3)、

ELP をそれぞれのコースの目的や状況に応じてカリキュラムに統合させていくことを推奨している（同、pp. 25-34）。内省は、「着目点を決めて、意識的に、考えること⁷」（同、p. 45）と定義づけられ、すなわち、言語学習・使用において、学習活動やコミュニケーション課題の前に内省すること（計画：planning）、学習や言語運用の最中に内省すること（モニター：monitoring）、学習や課題が完了した後に内省すること（評価：evaluation）であり、ELP を使うことによってこれら3つの内省が相互連関的に実現するとしている（同、p. 45）。たとえば、言語バイオグラフィーにある「目標・学習計画」を利用して学習計画を立て、それに基づき学習者が自身の学習をメタの視点からモニターし、また、資料集に収集する材料を自ら評価の視点を持って選択し、自分が立てた学習目標・学習計画をふり返り、自己評価表やチェックリストに自分の言語能力を書き込む作業を通じて、自らを評価する、という具合である。計画・モニター・評価の3つの内省が互いに作用し合っていることがわかる。また、自己評価に関していえば、学習者は、主に言語パスポートで総括的評価を行い、言語バイオグラフィーと資料集では形成的評価を行うとする（同、p. 55）。学習者が学習経験を通じて形成的評価を経験することで、自身の総括的評価の力も熟達していくという。さらに、学習者が評価する対象を「学習過程 (learning process)」「コミュニケーションの熟達度 (communication proficiency)」「言語の熟達度 (linguistic proficiency)」に分類し、自己評価と他者による評価（試験や検定を含む）を互いに補完しあうことの重要性を説いている。

ELP を教室で利用するにあたり、それぞれの教師が背景理念を理解し、その理念に基づいて個々の現場で利用の仕方を考えることが必要となる。欧州評議会は現場へのELP導入をテーマにした教師向けのセミナーを開催し⁸、さらに、European Centre for Modern Languages (ECML) は支援プロジェクトの一環で、教師養成向けELP導入・活用のための教材⁹を開発するなど、教師の支援の方策が考えられている。

2.4 認定

欧州評議会は、各地で作成されたモデルの質の保証を図るために、欧州評議会 ELP 認定委員会を設置し、委員会の承認を受けなければ公的に発行・使用ができない体制をとっている。認定方法は欧州評議会のウェブサイトに記載され¹⁰、審査には10名の委員があたっている。資料1は、欧州評議会がウェブで公開している認定申請書である。

3. ELPの運用

3.1 多種の ELP

3.1.1 ELP の種類

Lenz and Schneider (2001) による“European Language Portfolio Guide for Developers” (以下、「開発者用ガイドブック」)では、ELPは学習者の年齢、学習者集団の社会的性質、導入先機関の学習環境や文化的・教育的伝統など、それぞれの文脈によって独自に開発することが強く推奨される (pp. 10-38)。特に年齢は重要な要因である。「開発者用ガイドブック」では年齢別に3つの基本形(幼児・児童期、青年期、成人向け)に分類し、各段階における言語学習観や学習環境の特徴を挙げている。「幼児・児童期の言語学習」では複言語や異文化に対する気づきを深め、言語学習の動機を高めることが優先される。「青年期の言語学習」では学校内外の言語接触が頻繁になり、学習者の自律性が強く求められ、また言語能力の熟達度が重視される。この頃から他者や他機関に自分の言語能力を説明・報告する必要性も増してくる。「成人のための言語学習」では、職業的なニーズにより専門性の高い言語能力が求められるようになり、言語学習は自主的に (self-directed) かつ自己管理型 (self-organized) で行われるようになる。ELPの作成にあたっては、年齢ごとに異なる言語学習の特徴を構成内容に反映させるだけでなく、デザインや形式にも工夫を加えることが推奨される。

フランスの子ども向け ELP “Mon Premier Portfolio (わたしのはじめてのポートフォリオ)”¹¹ は対象者別の ELP デザインを見るうえでの好例といえる。約 40cm 四方に色彩豊かにまとめられた、すごろく形式のポートフォリオは、子どもが楽しく記述できる工夫が施されている。2つの主要機能である報告的機能、教育的機能を意識しながら、自己評価チェックリストを含む言語バイオグラフィーに重点を置き、家族や友人、好み(映画・テレビ、音楽、スポーツ、食事など)、言葉を使ってできること、旅行など身近な異言語・異文化体験等を簡単に記す内容となっており、成人向けモデルとの違いは顕著である。

3.1.2 ELP 実例：チューリンゲンモデル

ELP 実践例としてチューリンゲン州(ドイツ)が開発した ELP¹² モデル(以下、チューリンゲンモデル)¹³を紹介する。チューリンゲン州では2001年度より小学校3年生¹⁴からの外国語教育が義務付けられ、CEFRの共通参照レベルに基づいた外国語教育政策を

打ち出している¹⁵。チューリンゲン文化省と州全域の教育機関から集められた教員・研究者チームによって開発されたチューリンゲンモデルは、「初等教育向け」「前期中等教育向け」「後期中等教育向け」の3種があり、「教師のための手引書」とあわせて2002年10月に欧州評議会から認定を受けている。2003年2月から24の学校¹⁶でパイロット事業が実施され、子どもから大人まで多くの教育現場にELPが浸透しつつある。

学習者中心の考え方に基づいたチューリンゲンモデルには以下の目的がある¹⁷。

- ポートフォリオは学習者に属する。学習者自身が記録し、資料をまとめ、管理していく（pflegen）ものである。
- 学校内外の言語の学びを意識化し、言語学習状況や言語能力を自ら認識、評価、記録することで「自己管理能力（Selbstkompetenz）」を育成する。
- 異文化体験を含めた学校内外の言語活動を記録する。
- 複言語性に対する気づきの視点を養い、異文化間能力を育てる。
- CEFRの6つの共通参照レベルに依拠することにより、ヨーロッパ内での評価の同等性を保障する。
- 進級、転校、卒業あるいは外国語教師の交代に際し、自分の言語能力を明白に提示することができる。転じて、ELPは教育機関を越えて個人の言語情報を伝える「橋渡し（Brücke）」の役割を果たす。

一方、チューリンゲンモデルの構成については、基本の3部構成（言語パスポート、言語バイオグラフィー、資料集）であることに加え、次のような特徴がある。

- 対象者別（初等教育、前期中等教育、後期中等教育）にポートフォリオモデルを3点提示するが、その中で使うロゴや主要な構成項目は統一する。
- 言語パスポートに関して、ヨーロッパ内の公平を期す目的から「標準言語パスポート」を活用するが、次の2項目が付加されている。

①言語能力の熟達度と異言語・異文化体験の概要（履歴書形式）¹⁸

②チューリンゲン州教育制度の説明

チューリンゲンの対象者別ポートフォリオは、①初等教育向け「わたしのはじめてのポートフォリオ（Mein erstes Portfolio）」、②前期中等教育向け「私の言語ポートフォリオ（Mein Sprachen-Portfolio）」、そして③後期中等教育向け「ヨーロッパ言語ポートフォリオ（Europäisches Sprachen-Portfolio）」である。表2であげた言語ポートフォリオの構成に

表3 チューリンゲンモデル概要

チューリンゲンモデル 対象	①わたしのはじめてのポートフォリオ 初等教育 (8～11歳)	②私の言語ポートフォリオ 前期中等教育 (10～16歳)	③ヨーロッパ言語ポートフォリオ 後期中等教育 (15歳以上)	
特徴	<ul style="list-style-type: none"> はじめて文化的背景について考える。 「わたしのことば」(言語は財産という考え方): 言語的、非言語的接触が少しずつ増えていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校内外で習得された異文化間能力についての内省が増える。 学校外で得られた「財産」の意識化: 学校外の場面で様々なふれあいの可能性があり、そこで得られた結びつきが財産である。 	<ul style="list-style-type: none"> 実社会の異文化体験について内省する。 財産目録を確認し、言語パスポートに書き写す。 	
言語パスポート	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価表 言語の資格一覧 言語パスポート(履歴書形式: 異文化体験含) 言語学習と異文化体験一覧 その他: チューリンゲン州の外国語教育システムの説明 	<ul style="list-style-type: none"> 「標準言語パスポート」を3モデル全てに適用 言語パスポート概観(履歴書形式)とチューリンゲン州教育システムは追加項目。 		
言語バイオグラフィー	言語学習と異文化の個人史	<ul style="list-style-type: none"> 私のことば(文化) 私が知っていることば 行ったことのある国 知っている国・人、外国の好きな映画・本、外国の友達との交流などの異言語体験 	<ul style="list-style-type: none"> 私が理解できる・話せる言語 言語学習歴(学校内・外) 外国での言語体験 文通・チャット友達 興味のある外国文化 	<ul style="list-style-type: none"> 私の言語体験 外国での言語体験 言語学習の道のり(方法、重点の置き方)
	チェックリスト: 共通参照レベルに関係あるもの	<ul style="list-style-type: none"> ことばをどのくらい理解しているか、どのくらいできるか 「聞く」「読む」「話す」「書く」について自己評価(A1～B1/B2) 	<ul style="list-style-type: none"> 私の言語学習(言語学習者としての私) 「聞く」「読む」「会話に参加する」「まとまった話をする」「書く」について自己評価(A1～C2) 	<ul style="list-style-type: none"> 私の言語学習: 高学年 「聞く」「読む」「会話に参加する」「まとまった話をする」「書く」について自己評価(A1～C2)
	チェックリスト: 共通参照レベルに関係ないもの	<ul style="list-style-type: none"> 私の学習に役立つこと 例: 「聞く」時に～をしている、～に気をつけている→学習ストラテジー 	<ul style="list-style-type: none"> 私の学習に役立つこと 例: 「聞く」時に～をしている、～に気をつけている→学習ストラテジー 	
	目標・学習計画	<ul style="list-style-type: none"> 私の目標 その言語で、もっと何が/他にどんなことができるようになりたいか、教師からのコメント 	<ul style="list-style-type: none"> 私の学習計画と振り返り その言語で、もっと何ができるようになりたいか、どんな機会を生かしたいか、教師からのアドバイス→達成できた目標、達成できなかったこと、その理由、教師からのコメント 	<ul style="list-style-type: none"> 私の学習計画と振り返り その言語で、もっと何ができるようになりたいか、どんな機会を生かしたいか、教師からのアドバイス→達成できた目標、達成できなかったこと、その理由、教師からのコメント
資料集	<ul style="list-style-type: none"> 大切な資料(学習成果) 私の趣味(異文化、異言語) プロジェクトの成果 教師からの評価 	<ul style="list-style-type: none"> 私の成果 私の経験 私の趣味(異文化・異言語) 私の言語プロジェクト 	<ul style="list-style-type: none"> 私の成果 私の経験 私の趣味(異文化・異言語) 私の言語プロジェクト 私の言語修了書 	
その他	<ul style="list-style-type: none"> 教師からの評価(共通参照レベル) 	<ul style="list-style-type: none"> 教師からの評価(共通参照レベル) 	<ul style="list-style-type: none"> 教師からの評価(共通参照レベル) 	
教師のための手引書	<ul style="list-style-type: none"> 目次: ELPとは何か ELPの3部構成と意義 ELPの運用 <ul style="list-style-type: none"> バインダーの表紙を自由に貼ったり書いたり「自分用」ポートフォリオを作成できる。 自己評価は◎を使う。 学習継続の動機付けが優先される。 学習ストラテジーに関しても簡単に記述する。 基本的に授業内に作業し、学校側が管理する。時々家に持ち帰り家族や友人に見せる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「言語学習者としての私」という視点が重視されるようになり、学習者の自律性が求められる。 様々な言語活動を行うため他教科(歴史、地理、芸術、スポーツ、音楽等)との連携が望ましい。 can do記述が分からない場合は教師や親が手助けしてよい。 転校時や進学時に役立つ資料集も重要で、自分で分類し保存する作業にも価値が置かれる。 高学年になるにつれ、職業的な方向付けや留学などの希望と言語学習が結びつくようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 他科目での言語活動を含むプロジェクトが盛んに行われる。 留学や交換プログラム参加など実際のニーズから欧州内で通用する言語パスポートの重要性が増す。 ①、②に比べバイオグラフィーが簡素化される。共通参照レベルに基づいて自己評価することにも慣れてくる。 	

(参考資料) Thüringer Kultusministerium (2002a) Mein erstes Portfolio

Thüringer Kultusministerium (2002b) Mein Sprachen-Portfolio

Thüringer Kultusministerium (2002c) Europäisches Sprachen-Portfolio

Thüringer Kultusministerium (2002d) Europäisches Sprachen-Portfolio: Leitfaden für das Thüringer Modell

従って3種のポートフォリオの中身と特徴、および「教師のための手引書（Europäisches Sprachen-Portfolio: Leitfaden für Thüringer Modell）」の内容を表3にまとめる。

「教師のための手引書」にはポートフォリオの目的と意義と各種ポートフォリオの構成の内容と重点が説明されている。たとえば、「わたしのはじめてのポートフォリオ」は、対象が小学生であることを考慮して「言葉を学び続けたい」という学習継続の動機につながるよう、時に家族や友人の力を借りながら楽しく ELP を利用することが求められている。また、基本的に学校側による管理が推奨されている。中学生対象の「私の言語ポートフォリオ」では、言語（学習）体験が多様化する中で自己の言語能力や異文化体験を記録し、学習ストラテジーをどのように学習に盛り込むかを計画していくことに重きが置かれる。ここでいう学習ストラテジーとは、「聞くときには自らメモを取るようにする」「会話をするときには相手のジェスチャーや表情に気をつける」など、言語活動を円滑に行ううえで「助けになること」である。この時期になると、欧州内で通用する言語や文化体験の証明書として言語パスポートの役割が増してくる。高校生向けの「ヨーロッパ言語ポートフォリオ」になると、職業や進学といった実質的なニーズから言語学習が捉えられるようになり、ポートフォリオの管理は完全に学習者の自己責任となる。試験や検定といった外部機関の評価も重視されるようになる。

チューリンゲン州は予算削減にも関わらず積極的にポートフォリオ導入プロジェクトを継続し、2007年には40%の普及率を達成している（Schärer 2008: 6）。教育現場が連携しながら州レベルの改革を綿々と進めてきた成果だといえる。

ドイツでは各州が義務教育に ELP を導入するだけでなく、Volkshochschule（VHS）と呼ばれる市民大学が中心となって成人向け ELP の開発を進めている。2003年秋に行われた州内の言語教育関係者の専門家会議において、市民大学主導で成人向け言語ポートフォリオを共同開発することが決議され、チューリンゲンモデルを土台とした ELP の研究が進められた¹⁹。市民大学の成人向け ELP は2006年6月に「成人向けチューリンゲン市民大学モデル」

ELP チューリンゲンモデル



として ELP 認定委員会の承認を受け、一部の市民大学講座で導入されている。

3.2 ELP の運用

3.2.1 ELP の運用の現状

Little and Perclová (2001: 65) は、ELP を用いて言語的・文化的多様性を保護し、複言語主義を促進するためには、様々なレベル、たとえば学校、町、地方、国の間での相互作用が必要であることを述べ、Lenz (2004: 30) は「個を超えた効果」として ELP が教育現場にもたらす波及効果を指摘している。

2007 年ポートフォリオ中間報告 (Schärer 2008) による ELP の活用状況は、表 4 にまとめたとおりである。

表 4 ELP の作成・配布・使用数²⁰

学年度	作成・配布された ELP 累積数 ¹	報告された ELP 利用件数 (学年度別) ²	認証された ELP モデル (暦年別) ³		認証された ELP の平均複製数 ⁴	波及効果 (multipliers) ⁵	
			単年	累積数		単年	累積数
-2000	～	～ 30,000	6		5,000	300	300
2001-2002	～	～ 135,000	19	25	5,400	950	1,250
2002-2003	～	～ 220,000	16	41	5,400	800	2,250
2003-2004	～	～ 315,000	17	58	5,400	850	3,100
2004-2005	～ 1,250,000	～ 514,000	11	69	7,500	550	3,650
2005-2006	～ 2,000,000	～ 504,000 rev.	4	73	6,900	200	3,850
2006-2007	～ 2,500,000	～ 584,000	15	88	6,600	750	4,600
2007-2008	～ 3,000,000	～ ?	11	99	?	550	5,150

*1 作成された全ての ELP が配布されているとは限らず、配布された ELP の全てが利用されているとは限らない。

*2 ELP 利用合計数は進行中・計画中のプロジェクトも含む。

*3 ELP は、共通の原則と指針によって認証される。

*4 ELP 複製数は反響の指標として使われる。

*5 ELP の開発、導入によって波及効果をもたらしたもの (たとえば、教材開発やカリキュラム改善につながった報告例など)。

2007 年時点で、合計 93²¹ の ELP が 28 カ国の様々な研究チームによって開発され認定済みだが、そのうち 16 カ国が年少者から成人教育にわたって ELP を導入している (Schärer 2008: 4)。ヨーロッパ共通のガイドラインに基づきながら個々の文脈に当てはめる取り組みが各地で行われていることがわかる。

3.2.2 ELP の運用への支援

ELP を現場に導入し、さらに定着させるためには、教員研修、研究会、ワークショップ

の開催といった教師やコーディネーターを育てるための継続的な支援が欠かせない。「ELP をテーマにした研究会やワークショップは年々増加し、関係者間で ELP の目的や概念を共有する重要な場」となっていることは Schärer (2008) にも報告され、国や言語を超えた大小様々なプロジェクトが実施されている。

たとえば、ECML の中期プロジェクトである「ELP 活用のための教員養成 (Training Teachers to Use the European Language Portfolio : 通称 ELP_TT)」²² は 2004 ~ 2007 年にわたって進められ、2008 年からは後続プロジェクトとして ELP_TT²³ が始動している。プロジェクトの目的は、ELP の教育実践を支援するために教材を開発したり、ワークショップや教員養成イベントを開催したりすることであり、ELP_TT の成果は Little et al. の報告書 (2007) にまとめられている。報告書の付録にある CD-ROM には、「教員養成キット」(英・仏語) として、CEFR や ELP の重要な概念や、それらを教育現場で運用するための留意点²⁴ が紹介されるほか、ELP パイロットプロジェクトの情報、ワークショップ、研修会などのイベント情報 (英・仏・独語のうち 1 言語)、さらには ELP 関連論文 (英・仏語) が収録されている。

情報を交換し互いを支援し合うという意味で、ELP 関係者のネットワーク構築は重要である。ネットワークの例として、ELPNet- European Network for Implementing the European Language Portfolio for Adult Learners (以下、ELPNet) という国際プロジェクトがある。ELPNet は、オーストリア²⁵、チェコ²⁶、ドイツ²⁷、ラトビア²⁸、スペイン²⁹、スウェーデン³⁰、スイス³¹、イギリス³² から集まった成人教育機関のメンバーによって構成される。プロジェクトの目的は、各機関が持っている経験知を交換し合い、ELP を用いた効果的な教育実践とその可能性をともに探ることである。「学びのパートナーシップ (Learning Partnership)」と自らを称し、成人向け言語教育のネットワークを確立すべく活動している。具体的な議題としては、教育システムに根付かせるための ELP 導入戦略の検討、教員養成プログラムや教材開発との連携、異文化間教育の一環としての ELP 導入手法、などが挙げられ、様々な国や教育機関から集まったメンバーが議論を重ねることで、ELP の更なる社会的価値を見出そうとしている。

3.2.3 ELP 導入の効果と課題

一般社会への ELP 浸透について、Schärer (2008: 5、筆者訳) は、「[ELP を用いることで] コミュニケーションをとるための言語や異文化間能力につながる複言語主義という考え方

が、従業員に求められる資質として、一般の大・中企業から注目されるようになった」と報告している。教育現場でも、ELPがヨーロッパ内で年々普及していることが表4からも伺える。以下に、各地域、各現場で実施されてきたELPプロジェクトの成果について、Schärer (2008)をもとに概括する³³。

まず、ELPは複雑な概念を教師や学習者に具現化して示すものである。欧州評議会が掲げる概念、たとえば複言語主義、部分的能力、自律した学習者、異文化間能力など、を現場に浸透させる「仲介役 (mediator)」として機能している。さらに、ELPの役割として「教育実践にプラスの変化をもたらす」ことが挙げられる。ここでいう変化とは、個人の中で起こる変容と、個を超えた効果がある。

① 個人の中で起こる変容

- 学習者の自律性を促進し、学習の動機づけにも効果的である。
- 内省のためのツールとして役立ち、自己評価能力の発達にも寄与する。

② 個を超えた効果

- ELPの導入がカリキュラム改善につながる。
- ELPを利用することにより、教師を含めた学校内の対話が促進され学校全体の言語教育の方針策定につながる（ここでいう方針には、教育のための言語 (language of education) やカリキュラムを越えた言語使用も含まれる。）。

「①個人の中で起こる変容」に関して、Little et al. (2007)では、ELP活用によって学習者の自律性が育成されるだけでなく、教師自身の意識も変容することが述べられている。これは、ELPを自分の現場に導入することが、これまで教師が持っていた言語学習・教育の価値観やベリーフを再考する契機になるという指摘である。これまで実施されたELPプロジェクトでも、研究会やワークショップに積極的に参加することで、教師が互いから学び合い成長できたという肯定的な意見が多く寄せられている (Kohonen 2004他)。すなわち、教師同士の対話が実現したということができる。

「②個を超えた効果」については、ポートフォリオを教育実践に導入することでカリキュラムやシラバス改善の動きへとつながった事例が多く報告されており³⁴、この波及効果については、先に挙げた表4の右欄でその報告数が記されているとおりである。ELPが教育現場に変化をもたらし、さらには「促進剤 (catalyst)」となって個人や機関を超えた協働が実現されるのである (Schärer 2008: 6)。

しかしながらすべてのELPプロジェクトが成功事例となるわけではない。Schärer

(2008) は、プロジェクトが停滞してしまう要因として次のような点をあげている。

- カリキュラムの方向性と ELP の理念に隔たりがある場合、プラスの効果を期待することは難しい。
- ELP を効果的に活用するためには、授業の中で ELP のための時間を確保する必要がある。
- 学習者中心の考え方がすべての教師や学習者の選好に合うわけではない。

また、ELP は時間の浪費であり教師に負荷がかかるのではないかという消極的な意見も時に見られるが、Schärer (2004: 18) は、短期的に特筆すべき変化がなくとも長期的に見ると先行事例のようなプラスの効果がみられ、結果的に教師の負担軽減にもつながると指摘する。また Little et al. (2007) では、変化にはストレスがつきものであり、教師の意識改革や学校文化におけるパラダイム転換には時間と労力がかかることに言及している。

3.3 ELP の広がり

ELP は常に発展の過程にあるものである。各教育現場で、あるいは機関や地域を越えたレベルで様々な取り組みが行われているが、ここでは、電子化、ヨーロッパ共通の尺度という切り口、ヨーロッパ外の取り組みから ELP の可能性を探る。

① 電子版ポートフォリオ

EAQUALS³⁵-ALTE³⁶ とオランダの国立現代語局 (National Bureau of Modern Foreign Languages) はそれぞれ 2000 年、2007 年に電子版ポートフォリオを公開している³⁷。電子版ポートフォリオも紙媒体 ELP と同様、「言語パスポート」「言語バイオグラフィー」「資料集」の 3 部で構成されている。EAQUALS-ALTE は世界で初めて電子版ポートフォリオ (ePortfolio あるいは eELP と呼ばれる) を手がけており、同時に「eELP の利用ガイド (The EAQUALS-ALTE eELP Guided Pathway)³⁸」をウェブ上で公開し、ELP 電子化の利点を挙げている。たとえば、ELP のバージョンを適宜更新できること、自分のデータを eELP プログラム上の資料集に保存できるだけでなく、簡単にエクスポート・インポートしたりメールに添付したりメモリースティックに保存したりできること、(必要ならば履歴書の形式で) 印刷可能なこと、などである。eELP のウェブサイトメンバー登録し、eELP ファイルをダウンロードして指定プログラムを起動させるとインターネットに接続しなくても作業ができるが、更新時はネットワーク環境が必要となる。特に成人向け (あるいは中等教育以上) の ELP 導入を考えたとき、利便性の高い eELP は今後も発展が期待

できるであろう。

② ユーロパス (Europass)³⁹

2004年に欧州議会 (European Parliament) と欧州理事会 (European Council) によって議決されたユーロパスは、資格・能力の身分証である。特に、職業領域と教育領域におけるヨーロッパの人的流動性を円滑にするために、個人の能力を明確かつ簡潔に示す機能、すなわち欧州各国が独自に持つ資格制度、試験・検定を誰の目にも明らかにする役割を有している。ウェブサイトには5つの資料が記入サンプルとともに掲載されている。これまでの学歴、職歴、業績を示した「ユーロパス：履歴書 (Europass CV)」と言語能力を共通の尺度で端的に示す「ユーロパス：言語パスポート (Europass Language Portfolio)」は各人が作成し、留学先や就職先など受け入れ機関に提示するものである。各種資格や検定の補足説明をする「ユーロパス：証明書の補足資料 (Europass Certificate Supplement)」、各種卒業資格の補足説明をする「ユーロパス：卒業資格の補足資料 (Europass Diploma Supplement)」、他国での教育・職業経験の概要と成果を記録した「ユーロパス：モビリティ証明書 (Europass Mobility)」は組織・機関側が作成するものである。「ユーロパス：言語パスポート」は本節で述べてきた ELP の言語パスポート部分をさらに簡略化したものであり、共通参照レベルを用いた自己評価と海外滞在経験を記すことができる。これらユーロパスの資料はすべてヨーロッパの標準文書として認められており、各国のユーロパスセンターによって支援されている。

こうしたヨーロッパの動向を見ると、人の移動を効率よく公平に行う手立てを講ずるといふ実質的なニーズから、資格や能力の尺度標準化を推し進めた経緯がわかる。

③ その他の地域の取り組み

近年、ヨーロッパとは別の文脈で ELP の意義が認められるようになった。たとえば米国バージニア州の Linguafolio は、米国の American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL) のレベル記述に則った自己評価チェックリスト、言語バイオグラフィー、資料集をウェブサイトで提供している。また日本では、地域の日本語教育のために青木直子氏らが作成した「日本語ポートフォリオ」の取り組みがある。ここで重視されるのは、ELP の教育的機能であり、たとえば、「学習者が日本語ができるようになったら何をしたいかという長期的な目標と、具体的で現実的な短期目標をもつ」ことや「学習者

と学習支援者が定期的に学習の進行状況をふり返り、問題があれば解決するための方策を考える」⁴⁰ ことなどに重点が置かれている。

以上から、共通の尺度を用いることで対外的な「わかりやすさ」を求める動き、またポートフォリオ評価の有効性を認め ELP に例を求めながら独自のポートフォリオを開発する動きがあると見てとれる。

4. 考察とまとめ

ELP は「言語パスポート」「言語バイオグラフィー」「資料集」の3部から構成され、学習者の言語学習を支援し、保障する仕組みである。CEFR の共通参照レベルや例示的能力記述文に基づくことで、所有する個人が、別の教育機関や職場に移動するとき、さらに地域や国を越えて移動するときに、自己の学習や経験の記録を対外的に示す証明書として利用することができる。これは ELP の報告的機能であり、人的流動性をともなう今日の社会で強く求められる役割である。一方、生涯を通じて内省を繰り返しながら、言語学習の継続動機を獲得し、複言語能力・複文化能力を身につけていくことができる教育的機能も重視されている。

Little and Perclová (2001) は、教師用ガイドブックの中で、教育的機能の根幹が「自己評価」と「内省」であることを主張する。自身の言語能力の熟達度を自ら認識し、評価し、記録するという作業を通じて自分の学習を管理する能力が育成され、学習の実際を客観的に把握するというメタの視点を養うことができる。また、言語学習をするうえで、3つの内省、すなわち、〈学習計画を立てること〉、〈学習状況をモニターすること〉、〈学習を評価すること〉、という一連の流れを継続的に行うことで、自律的な学習者を育てることができるとする。さらに、このような内省的な自己評価を通じて、学習の動機付けを実現することもできるだろう。

また、学校内外での言語活動や異文化とのふれあいを意識的に記録することは、異言語や異文化に対する気づきの視点を与えることであり、異文化間能力の育成につながる。このように個人の中に存在する複言語性・複文化性を確認して意識化するという作業が、CEFR の理念である複言語主義の具現化につながるといえるだろう。

教育現場での活用を考えたときに、教師の負担が増える点は否めない。ヨーロッパの先事例に挙げられるような効果（個人の中で起こる変容、個を超えた効果）を期待するた

めには、カリキュラムやコースのデザイナー、各教師が ELP の意義を理解し、自分の文脈で解釈し、それ相応の時間を授業中に確保し、ELP を使った教育実践を繰り返すことが求められる。ヨーロッパでは教師を支援するための仕組みとして、ECML が中心となり教員養成プロジェクトやワークショップが開催されている。こうしたプロジェクトの成果はウェブページに掲載され、ガイドブックや報告書の形で参照することができる。このような体系的な支援体制があってはじめて、多くの教育現場での運用が可能になるといえるよう。

JF スタンドアードは、多言語化する国際社会の中に日本語を位置づけるための 1 つの施策である。学習者中心の考え方、自律性の促進、異文化間能力の育成、複言語・複文化主義といった新しい言語教育観・言語学習観の中で発展した ELP に価値を認め、日本語教育の文脈で解釈し、これまでの国際交流基金の実践を繰り返りながら、自らのポートフォリオサンプルを開発していきたいと思う。それは現行の日本語教育を新しいパラダイムで捉え直す作業だともいえるだろう。

注：

- 1 Konferenz der kantonalen Erziehungsdirektoren (EDK) は、スイス各州の教育委員会代表者が集う評議会。
- 2 前節で述べたとおりルシュリコン・シンポジウムとは、1991 年にスイスのルシュリコンで開催された政府間シンポジウムである。テーマは「ヨーロッパの言語学習における透明性と一貫性：目標、評価、認定 (Transparency and Coherence in Language Learning in Europe: Objectives, Evaluation, Certification)」であった。このシンポジウムでは、ヨーロッパ域内の人の移動や相互理解の促進のため、生涯にわたる言語学習の重要性が再確認され、言語能力の熟達度の共通枠組みと、学習者が自身の学習や発達を記録する ELP の開発が提案された。
- 3 ここでは、Council of Europe 2004b で使われていた “independent” という語を「自立的」と訳した小木曾訳を用いる。
- 4 本書では、intercultural competence の訳語として「異文化間能力」を用いるが、ここでは Council of Europe (2008) の訳に拠る。
- 5 Lenz and Schneider (2001) および Lenz (2004) を元に筆者が作成。
- 6 Little and Perclová (2001)
- 7 筆者訳 (“thinking about something in a conscious and focussed way”)
- 8 ELP のホームページ上に 2001 年から 2007 年までのセミナーの記録が掲載されている。
(http://www.coe.int/T/DG4/Portfolio/?L=E&M=/main_pages/events.html) 2009 年 1 月 23 日検索
- 9 Little et al. (2007) などがある。
- 10 欧州評議会ヨーロッパ言語ポートフォリオ HP 参照のこと
- 11 Didier (2001)
- 12 ドイツ語で「ヨーロッパ言語ポートフォリオ」は Europäisches Sprachenportfolio で、略として

Portfolio あるいは ESP が用いられる。

- 13 Thüringer Kultusministerium (2002a; 2002b; 2002c; 2002d)
- 14 Grundschule は「基礎学校」と訳されるがわかりやすさを優先し本節では「小学校」の訳を充てる。
- 15 チューリンゲン州の外国語教育政策は松尾 (2005) に詳しい。
- 16 約 8500 人の児童生徒が試験的に ELP を利用した。チューリンゲン州文化省ウェブサイトより。
- 17 チューリンゲン州文化省 HP および Thüringer Kultusministerium (2002d) より筆者が抄訳。
- 18 言語学習歴、各言語の熟達度 (CEFR の共通参照レベル)、職業領域での言語使用経験、異文化体験を簡単に記述できる形式。証明写真貼付もできる。
- 19 SprachenPortfolio HP 参照。
- 20 Schärer (2008:3) を筆者が抄訳。
- 21 欧州評議会の HP によると、2009 年 2 月現在、97 件の ELP が認定済みである。
- 22 詳細は ECML ELP_TT プロジェクト HP を参照のこと。
- 23 詳細は ECML ELP_TT2 プロジェクト HP を参照のこと。
- 24 Little et al. (2007: 33-39) に記される点は以下のとおり。ELP に対する個人・集団の内省、ワークショップでの経験を踏まえ、ワークショップ参加後に行う活動の計画、CEFR の共通参照レベルの研究・考察、共通参照レベルに基づいた自己評価、学習に関する内省の可視化、「自律した学習者」の研究・考察、複言語主義を踏まえた使用言語に関する議論、学習者の異文化経験を発展させる活動例の考案、ELP とカリキュラム・教材を一致させる方法の考案、評価活動の研究、など。
- 25 Verband Österreichischer Volkshochschulen (VÖV; オーストリア市民大学連盟)
- 26 EDUCA - vzdelávací centrum
- 27 Thüringer Volkshochschulverband e. V. (チューリンゲン州市民大学)
- 28 PSCL, the Public Service Language Centre
- 29 Escuela Oficial de Idiomas de Palma de Mallorca
- 30 Folkuniversitetet Lund
- 31 Migros-Genossenschafts-Bund
- 32 CILT (the National Centre of Languages) はイギリスの言語教育に関する事業を行う機関。
- 33 筆者が編訳。
- 34 たとえば、Little and Perclová (2001)、Lenz and Schneider (2001)、Lenz (2004)、Schärer (2000, 2008)
- 35 1991 年に設立された EAQUALS (the European Association for Quality Language Services) はヨーロッパの言語サービスの品質管理を担当する機関である。
- 36 1989 年設立の ALTE (Association of Language Testers in Europe) はヨーロッパ語学検定協会として、ヨーロッパの諸言語を対象とした様々な試験を実施し、能力評価基準を提供している。
- 37 EAQUALS-ALTE 電子版ポートフォリオ HP、オランダの国立現代語局の電子版ポートフォリオ HP を参照のこと。
- 38 EAQUALS-ALTE 電子版ポートフォリオ HP を参照のこと。
- 39 ユーロパスについては、Europass HP を参照のこと
- 40 青木 (2006) 「日本語ポートフォリオ 改訂版」HP を参照のこと。

参考文献：

- Council of Europe (2004a) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』初版第1刷 吉島茂、大橋理枝(訳、編)朝日出版社
- (2008) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』初版第2刷 吉島茂、大橋理枝(訳、編)朝日出版社
- 小木曾左枝子 (2005) 「ヨーロッパ言語ポートフォリオ」『ヨーロッパにおける日本語教育と Common European Framework of Reference for Languages』ヨーロッパ日本語教師会 (AJE)、52-62、国際交流基金
- B.D. シャクリー、N. バーバー、R. アンブローズ、S. ハンズフォード (2001) 『ポートフォリオをデザインする 教育評価への新しい挑戦』田中耕治監訳、ミネルヴァ書房
- 田中耕治 (2008) 『教育評価』岩波書店
- 松尾馨 (2005) 「テューリンゲン州の外国語教育政策と外国語特別ギムナジウムでの ELP 活例」『ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of Reference for Languages』ヨーロッパ日本語教師会 (AJE)、121-130、国際交流基金
- Byram, Michael (2008) European Approaches to Language (Education) Policy: Historical and Contemporary Perspectives. 第10回日本言語政策学会大会基調講演資料
- Council of Europe (1992) North, Brian (eds.) *Transparency and coherence in language learning in Europe: objectives, assessment and certification. Symposium held in Rüschtikon. 10-16 November 1991*. Strasbourg: Council of Europe.
- (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2004b) *European Language Portfolio (ELP) Principles and Guidelines – with added explanatory notes (Version 1.0)*. Strasbourg: Council of Europe. <http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Source/Guidelines_EN.pdf> 2009年1月21日検索
- Didier (eds.) (2001) *Mon Premier Portfolio: Portfolio européen des langues*. CIEP, Conseil de l'Europe
- Holec, Henri (1981) *Autonomy and Foreign Language Learning*. Oxford: Pergamon
- Kohonen, Viljo and Gerard Westhoff (2002) Enhancing the pedagogical aspects of the European Language Portfolio (ELP). Strasbourg: Council of Europe. <http://www.coe.int/T/DG4/Portfolio/documents/studies_kohonen_westhoff.doc> 2009年1月18日検索
- Kohonen, Viljo (2004) On the pedagogical significance of the European Language Portfolio: findings of the Finnish pilot project. In Mäkinen, K., Kaikkonen, P. and Kohonen, V. (eds.) *Future perspectives in foreign language education*. Studies of the faculty of education of the University of Oulu 101, pp. 27–44. Oulu. <<http://www.kknjo.univ.gda.pl/podstrony/PDF/Kohonen13.5.04.pdf>> 2009年1月25日検索
- (2006) On the notions of the language learner, student and user in FL education: building the road as we travel. In Päivi Pietilä, Pekka Lintunen and Heini-Marja Järvinen (eds.), *Kielenoppija tänään – Language learners of today* 38-66. AFinLAN vuosikirja 2006/n:o 64. Jyväskylä: University of Jyväskylä. <http://www.ecml.at/mtp2/Elp_tt/Results/DM_layout/Reference%20Materials/English/VK%20The%20language%20learner.pdf> 2009年1月25日検索
- Lenz, Peter (2004) The European Language Portfolio Guide for Developers. In Morrow, K. (ed.), *Insights from the Common European Framework*. Oxford: Oxford University Press.
- Lenz, Peter and Günter Schneider (2001) European Language Portfolio Guide for Developers. Strasbourg:

Council of Europe.

- (2002) Developing the Swiss model of the European Language Portfolio. In Alderson, J. Charles. (eds), *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment: Case Studies*. pp. 68-86. Strasbourg: Council of Europe
- (2004) *A bank of descriptors for self-assessment in European Language Portfolios*. Council of Europe. Strasbourg: Council of Europe <<http://commonweb.unifr.ch/cerle/pub/cerleweb/portfolio/downloadable-docu/collection-of-ELP-descriptors-feb-04.pdf>> 2008年12月24日検索
- Little, David and Radka Perclová (2001) *The European Language Portfolio: a guide for teachers and teacher trainers*. Strasbourg: Council of Europe. <http://www.coe.int/T/DG4/Portfolio/documents/ELPguide_teacherstrainers.pdf> 2009年1月15日検索
- Little, David and Hans-Peter Hodel, Viljo Kohonen, Dick Meijer and Radka Perclová (2007) *Preparing Teachers to Use the European Language Portfolio – arguments, materials and resources*. Graz: European Centre for Modern Languages. <http://www.ecml.at/mtp2/Elp_tt/html/ELPTT_E_Results.htm> 2009年1月15日検索
- Schärer, Rolf (2000) Final Report: A European Language Portfolio: Pilot Project Phase 1998-2000. Strasbourg: Council of Europe. <http://www.ecml.at/mtp2/Elp_tt/Results/DM_layout/Reference%20Materials/English/Final%20report%20on%20ELP%20pilot%20project%20_E_.pdf> 2009年1月15日検索
- (2004) A European Language Portfolio: From piloting to implementation (2001-2004): Consolidated report- Final version. Strasbourg: Council of Europe. <<http://www.coe.int/T/DG4/Portfolio/documents/Consolidated%20report%20rev%20030904.doc>> 2009年1月6日検索
- (2008) European Language Portfolio: Interim Report 2007. Strasbourg: Council of Europe. <[http://www.coe.int/T/DG4/Portfolio/documents/DGIV-EDU-LANG%20\(2008\)%201%20Eng%20Interim%20Report%20ELP.doc](http://www.coe.int/T/DG4/Portfolio/documents/DGIV-EDU-LANG%20(2008)%201%20Eng%20Interim%20Report%20ELP.doc)> 2009年1月6日検索
- Thüringer Kultusministerium (2002a) *Mein erstes Portfolio*. Saalfeld: SDC Satz + Druck Centrum Sasalfeld GmbH
- (2002b) *Mein Sprachen-Portfolio*. Saalfeld: SDC Satz + Druck Centrum Sasalfeld GmbH
- (2002c) *Europäisches Sprachen-Portfolio*. Saalfeld: SDC Satz + Druck Centrum Sasalfeld GmbH
- (2002d) *Europäisches Sprachen-Portfolio: Leitfaden für das Thüringer Modell*. Saalfeld: SDC Satz+ Druck Centrum Sasalfeld GmbH
- (2007) “Implementing an ELP in Thuringia, Germany” (発表資料) European Centre for Modern Languages セミナー “Languages for social cohesion” <<http://elp.ecml.at/LinkClick.aspx?link=document%2F6-13+ELP+in+Thuringia+Graz+March+2007.Pdf&tabid=83&mid=391&language=en-GB>> 2009年1月15日検索

参考ウェブサイト：

- EAQUALS/ALTE 電子版ポータルフォリオ HP <www.eELP.org> 2009年1月20日検索
- ELPNet: European Network for Implementing the European language Portfolio for Adult Learners HP <<http://portfolio.network.grundtvig.googlepages.com/>> 2009年1月20日検索
- ELP_TT プロジェクト HP <http://www.ecml.at/mtp2/Elp_tt/> 2009年1月25日検索
- ELP_TT2 プロジェクト HP <<http://elp-tt2.ecml.at/>> 2009年1月25日検索

Europass HP 〈<http://europass.cedefop.europa.eu/>〉 2009年1月25日検索

SprachenPortfolio 〈<http://www.sprachenportfolio-deutschland.de/>〉 2009年1月16日検索

青木直子 (2006) 「日本語ポートフォリオ 改訂版」 〈<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~naoko/jlp/jlpjp.html>〉
2009年2月10日検索

欧州評議会ヨーロッパ言語ポートフォリオ HP

〈http://www.coe.int/t/dg4/portfolio/default.asp?l=e&m=/main_pages/welcome.html〉 2009年1月10日検索
オランダの国立現代語局の電子版ポートフォリオ HP

〈<http://www.europeestaalportfolio.nl/TaalPortfolio/show.do?ctx=10010,10020>〉 2009年1月20日検索
境一三「ヨーロッパ共通参照枠の基本理念と日本における受容の問題 2007年12月5日神奈川大学横浜キャンパス外国語教育協議会講演会」(慶應義塾大学外国語教育研究センター) 〈<http://web.hc.keio.ac.jp/~skazumi/Jindai071205.pdf>〉 2009年2月20日検索

チューリング州文化省 HP

〈http://www.thuringen.de/de/tkm/eu_internationales/bildung/allgemein_bildende_schulen/mobilitaet_mehrsprachigkeit/sprachenportfolio/〉 2009年1月16日検索

資料 1：ヨーロッパ言語ポートフォリオの認定申請書記載項目

0	一般情報	2	言語パスポート部分について
0.1	貴機関の名称	2.1	Standard Language Passport (成人向け) または Europass Language Passport と一致しているか。
0.2	住所	2.2	任意の時点での個人の熟達度が言語別に概観できるか。
0.3	代表者氏名 (コンタクトパーソン)	2.3	定期的な更新が可能か。
0.4	ELP の概要説明、対象者	2.4	学校教育の内外で習得した、学習者のすべての言語能力の記録と内省を可能にしているか。
0.5	実施範囲	2.5	学校教育の内外で得た、正式な認定とすべての言語の能力の記録が可能か。
0.6	国家レベルの委員会や関連機関の通知 (該当する場合)	2.6	学校教育の内外で得た、異文化的な能力と経験の記録と内省が可能か。
0.7	提出された ELP モデルは、最終版と同じものか。	2.7	重要な言語体験、異文化体験の記録が可能か。
0.8	認定作業のため、ELP モデルは英語／仏語に完全に翻訳されているか。最終版で使用する言語は明記されているか。	2.8	言語の部分的能力や特定の能力の記録が可能か。
1	貴機関の ELP モデル全体について	2.9	自己評価、教育機関や試験による評価、そして適当とされる場合は教師による評価の記録が可能か。
1.1	学習者が所有するものであるか。	2.10	自己評価を、教師による評価や他の外部からの評価から完全に区別することは可能か。(ELP の所有者として、外部評価を含むかは学習者が判断する。)
1.2	ヨーロッパ中で認識され、理解されるよう、Guidelines に記載された最低限の共通項目を含んでいるか。	2.11	いつ、誰によって、どのような基準に沿って評価が行われたか記録することが可能か。
1.2.1	3 部構成 (言語パスポート、言語バイオグラフィアー、資料集) を順守しているか。	2.12	CEFR のレベルに沿って技能や能力の概観を記述することは可能か。
1.2.2	表紙と各部分の始めに、欧州評議会のロゴがあるか。	2.13	CEFR の自己評価表を含んでいるか。(年齢に即した記述文と一緒に含まれている可能性もある。)
1.2.3	ELP の用語 (言語パスポート、言語バイオグラフィアー、資料集) が使用されているか。	2.14	さまざまな教育機関、領域、地域間での学習の継続性を保障するか。
1.2.4	言語政策部門によって提供された、欧州評議会に関する標準文書を含んでいるか。	2.15	学習者の年齢、学習目的、文脈、背景などに応じて、学習者のニーズを考慮しているか。
1.3	表紙は、ELP のヨーロッパ的な特徴を反映しているか。	2.16	英語／仏語／他の地域の言語でのルーブリックを含んでいるか。
1.4	自己評価表など CEFR から抜粋された部分の翻訳は、CEFR の正式な翻訳か。もし正式な翻訳が存在しない場合、使用された翻訳は国家レベルの委員会に承認されているか。	3	言語バイオグラフィアー部分について
1.5	使用された ELP の用語 (タイトルや見出し) は、既に認定され同じ言語を使用している ELP モデルと同じか。	3.1	学習者が日常的に自身の学習計画に関わることを手助けしているか。
1.6	対象者に特有のニーズを満たしているか。	3.2	学習過程の内省を、日常的に、向上するように手助けしているか。
1.6.1	デザインや使用言語は、対象者にとって適切か。	3.3	学習の進歩の日常的な内省と評価を手助けしているか。
1.6.2	言語パスポートや言語バイオグラフィアーのレベルは、対象者にとって到達可能か。	3.4	学習者が各言語でできることを述べる場所と手段を提供しているか。
1.6.3	言語バイオグラフィアーの記述文は、対象者にとって適切か。	3.5	学習のための学びや学習者の自律性を促進しているか。
1.6.4	全体的なデザインは Principles and Guidelines に従っているか。	3.6	学校教育の内外で得た言語的・文化的体験について学習者が述べる箇所、手段を提供しているか。
1.7	ELP モデル内に一貫性はあるか。	3.7	複言語主義、つまり個人における複数の言語での能力の発達を促進しているか。
1.7.1	使用されている用語に一貫性はあるか。	3.8	自己評価表に含まれている概要的な記述文を拡張する、記述文のチェックリストを提供しているか。
1.7.2	3 つの構成部分のつながりは明確か。案内ガイドはあるか。	3.9	レベルと内容に関して対象となっている学習者に適切な記述文があるか。
1.7.3	ページ番号は明確にふられているか。	3.10	一人称の形式 (私は～ができる) の記述文があるか。
1.8	貴機関の教育システムで使用されているほかの ELP モデルとの一貫性はあるか。		
1.9	言語学習者としての、創造的な個人の成長を促すか。		
1.10	貴機関の ELP モデルは、学習者の自律性を促進しているか。(正式な文脈では、ELP は学習者に自身の学習の計画、モニター、評価に関わらせることを意図している。)		

3.11	使用された記述文の出典を明記しているか。(新しい記述文が開発された場合、その開発過程を書いてください。)	5	一般原則
3.12	主要な見出しは地域の言語だけでなく、英語／仏語にもなっているか。	5.1	どのようにすれば学習者は貴機関の ELP を入手、使用することができるか。(配布方法や学習者 1 人当たりの費用を述べよ。)
3.13	CEFR と調和した測定・評価基準を使用しているか。	5.2	どのように、ある学習者が彼／彼女の ELP の所有者であることがわかるか。
3.14	他の教育領域で使用されている ELP モデルと一貫性のあるレベルや記述文を使用しているか。	5.3	ELP の目的、意義、内容を学習者が理解できるかどのように確認するのか。
4	資料集部分について	5.4	必要であれば先住民の言語や移民の言語も含め、すべての言語能力や経験の記録を提供することにより、ヨーロッパ市民性が推進されるか。
4.1	学習者に保存したい資料を選び成果や経験を説明する機会を与えているか。	5.5	貴機関の文脈では、学習者が所有し提示したり維持したいと考えるほかの ELP が認識、支援され、価値があるものと見なされるか。
4.2	内容の更新や再編成を可能にしているか。	6	ELP 制作
4.3	複言語主義の発達を促しているか。どのように促しているか。	6.1	この ELP モデルは申請者の名称で制作されるか。
4.4	主要な見出しは地域の言語だけでなく、英語／仏語にもなっているか。	6.2	違う場合、誰がどんな名称で制作するのか。
4.5	学習過程のための資料集と報告のための資料集の区別がされているか。(認定の条件ではない。)	6.3	商業利益が生まれるか。
		6.4	ELP は何部制作されるか。
		6.5	ELP に対する評価や改訂の仕組みはどうなっているか。

(欧州評議会ヨーロッパ言語ポートフォリオ HP より、筆者訳)